

## 平成30年度 独創的研究助成費 実績報告書

平成31年 3月29日

報告者	学科名	看護学科	職名	助教	氏名	川下 菜穂子
研究課題	分娩介助技術習得におけるタブレット型端末を利用した学習効果の検証					
研究組織	氏名	所属・職		専門分野	役割分担	
	代表	川下 菜穂子	看護学科・助教	助産学	統括・調整・データ収集及び分析・成果発表	
	分担者	岡崎 愉加	看護学科・准教授	助産学	データ収集・分析・成果発表	
研究実績の概要	<p>【はじめに】助産師業務の中核をなす分娩介助では、母児の健康状態のアセスメント、分娩経過の診断と予測ができる能力等が求められ、助産師の判断の誤りは母児の健康に重大な影響を及ぼすことがあり、助産師学生といえども助産師同様の臨床能力が求められる。国際助産師連盟（ICM）は「助産師教育の世界基準（2010）」において、助産師教育基準の目的として「女性と家族のための安全な助産業務と質の高い助産ケアを促進する」「助産課程の継続的な改善を促し、それによって継続的な業務改善を促す」等が挙げている。看護技術の習得として、ビデオのフィードバック機能やタブレット型端末での録画・再生機能を導入した学習が行われており、先行研究<sup>1,2)</sup>（岩本ら 2001, 加治ら, 2014）では学生が自らの動作を客観的にみることができ、技術習得に効果があったことが明らかとなっている。しかし助産師教育においては、このような学習方法に対する研究は少ない。助産師教育の中でも分娩介助技術は、看護技術同様、反復練習が不可欠である。本研究では、学生がより効果的に分娩介助技術を習得するために、看護技術の習得で効果があったというタブレット型端末を助産師教育において導入しその効果を検証することを目的とした。</p>					

※ 次ページに続く

研究実績  
の概要

【方法】研究デザインは準実験研究及び面接法を用いた質的探索的研究。調査期間は2018年8月～12月。研究対象は本学助産師養成課程の4年生で、本研究への協力に同意した3名である。方法は次の通りである。

①研究対象者に、2019年8月～11月の期間に、学内及び学外での分娩介助技術の自己学習時にタブレット型端末で学習時の様子を録画し、学生自身もしくは教員と共にその録画された画像を用いて振り返り学習を行った。

②助産学実習Ⅱ終了後の12月に、「インタビューガイド」に基づいて、半構成的面接を実施した。

③インタビュー内容の分析は、録音した内容から逐語録を作成し、質的内容分析の手法を用いた。

なお本研究は岡山県立大学倫理委員会の承認を得て実施した（受付番号：18-32）。

【結果】タブレットの使用状況は表1のとおりである。学外の実習環境として、常に教員が引率している者は2名、週に2回程度の引率は1名であった。

表1 タブレット使用状況 (n=3)

		平均
使用頻度	学内	4.7回
	学外	4回
再生回数		8回

分析の結果、「助産実習に対する意欲」については、対象者全員が「意欲はあった」と答え、具体的には【分娩介助技術の流れ】【苦手な手技】【産婦への声かけ】の習得であった。

「タブレットの使用の有用性」については、【客観的にみれる】【学生同士で学べる】【自分の改善点が見える】であり、実際にタブレットを使用し、「タブレットの効果があった」と思う項目は、【清潔操作】【産婦への声かけ】【介助時の視線】【介助時の動き】【分娩介助手技】であった。【分娩介助手技】に関しては特に会陰保護や第3回旋、第4回旋、骨盤誘導線に沿った娩出などの改善に効果があった。「今後の課題」については、【学外用の固定アームの扱いにくい】【常に教員がいるので必要性がない】【撮影の工夫がいる】であった。

【考察】分娩介助技術は母と子の安全が最優先されるため、初学者である助産学生に対して、教員はよりきめ細やかな指導が不可欠となる。本研究では、タブレットを使用することで、分娩介助技術の一つ一つの手技や産婦への声かけや視線の配り方などを客観的にとらえることができていた。教員は一つ一つの手技をその場で指導することは重要ではあるが、分娩介助の一連の流れの中で、学生の産婦への関わり方や姿勢等をタブレットでフィードバックすることでより多様な指導ができると考えられる。

今回、学外に関しては実習環境の違いで、タブレットの必要性の意見が異なった。今回得た結果をさらに精査・修正し、次年度はアクションリサーチとして研究を継続し、学生がより効果的な分娩介助技術の習得ができるような教育方法を見出していきたい。

【文献】

- 1) 岩本真紀他：ビデオのフィードバック機能を利用した看護技術取得における学習効果（その1）—無菌操作の学習を例として—, 香川医科大学看護学雑誌, 5(1), 37-46, 2001.
- 2) 加治美幸他：タブレット型端末を導入しての看護技術の試み, 了徳寺大学研究紀要(8), 161-168, 2014.